

見知らぬ人 つなぐのは「人」



個人でラジオ番組がもてる。

そんな噂を聞きつけて、小さな、ひょとしたら世界でいちばん小さいかもしないラジオ局を訪ねてきました。

話をまず米国から。シカゴから車で3時間、イリノイ州にアーバナ・シャンペーンという地方都市があります。人口は12万ほど、日本人はおよそ400人住んでいます。このラジオで「ハルカなショー」という日本語番組が放送されています。コミュニティーラジオとよばれるこの超マイナーラジオ放送局が、日本とインターネットでつなぎ、スカイプで話されるその音を低出力FM用に調整して、この町で流しているのです。

担当するのは、京都市に住む西川麦子さん。学生時代に能登半島で「産婆さん」の調査をし、そのあとバングラデシュの農村で物乞いの調査を、さらにロンドンで「浮浪者法」や地域コミュニ

本日のテーマ

イリノイのFMで流れる京都の声

ニティーの調査をしてきた文化人類学者です。在外研究でイリノイに滞在している2011年に「ハルカなショー」を開始、日本に帰国してからも自宅の一室などを中継局としてこの番組を担当しつづけてきました。イリノイのこの放送局、町のメディア&アートセンターのなかにあって、年会費25ドルを払えば1週間に2本まで番組を担当することができます。移民問題、オガニックフード、童話の朗読、時事問題など、地元制作の番組は20あまり。西

川さんの番組には日米在住6人のスタッフのほかに、地元の日本人だけでなく、日本のサブカルチャーに関心のあるイリノイの学生たち、日本からもさまざまなお人出演します。新参者としてはじめこのNPOの活動を遠目に見て

いた西川さんは、「だれでもメディアになれるよ」という知人の一言に背中を押され、日本語番組を立ち上げました。東日本大地震の直後ということもあって、災害時のためにこうした多言語のチャンネルはぜったい必要だとの思いもあったのかもしれません。市民がメディアを利用するのではなくて、メディアに「なる」。見知らぬ人たちをつなぐのは結局「人」だということなのでしょうか。

取材するはずのこの番組

にわたしも出演するなどになつたのですが、途中、放送機器に不具合が生じ、放送ではそんな舞台裏の様子まで気配ごと伝わるのでした。アメリカのスタジオとやりとりしながら修繕するなかで、日本語を解さない初対面のスタッフと対話が生まれるなどとは、つゆ予想していませんでした。

市民として成熟しているというのは、社会のなかで生じているさまざまな問題の解決の糸口を、市民みずからが紡いでゆけるということです。問題解決のコン

「ハルカなショー」に出演後、パーソナリティーの西川麦子さん(左)と歓談する筆者。パソコンの画面にはイリノイにいるスタッフの顔が=京都市左京区

テクストをじぶんたちで編めるということ)が、市民がメディアになれるということが、ことじだったのです。

番組は「ハルカなショー」ホームページからの聴くいじがである。<http://haru.kanashow.org>

就職 因 清一 の ラジカルラジオ

ON AIR

7